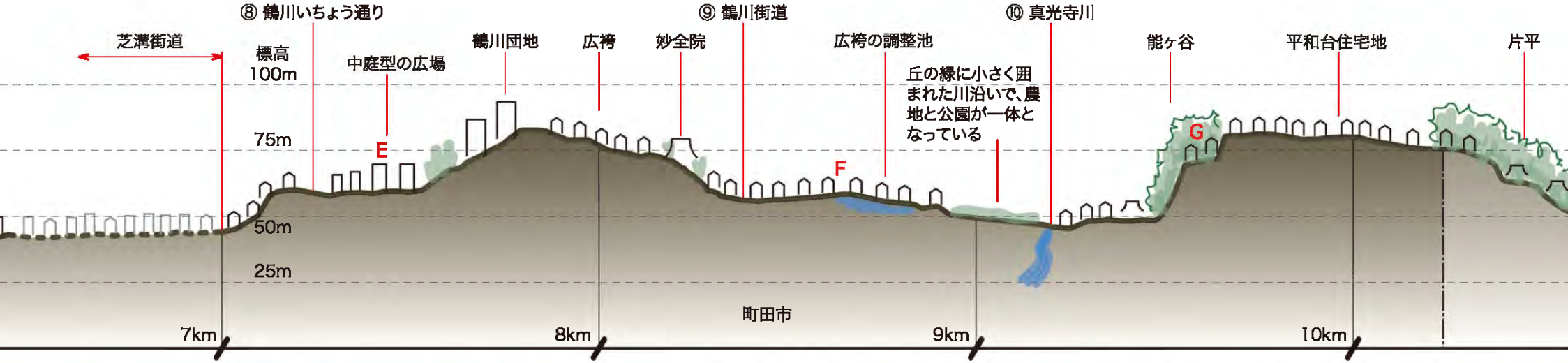
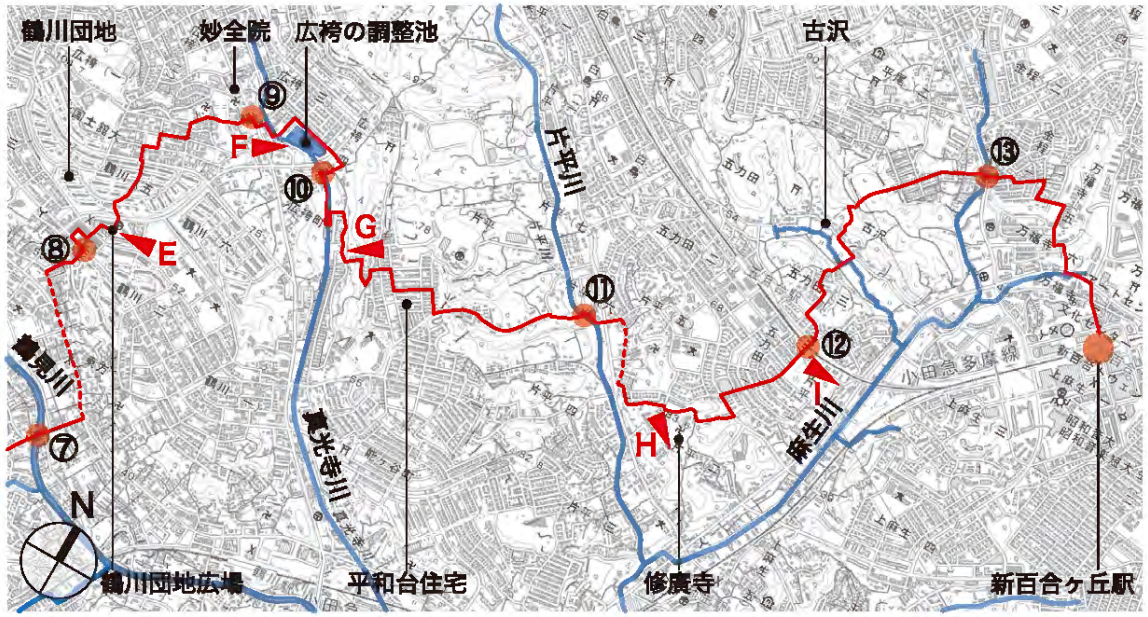
後半は芝溝街道から新百合ヶ丘駅まで、主たる道から外れ、ときに小道を辿りながら、東西に伸びる幾筋もの谷戸山を横断する。谷戸ごとの景観の違いをダイレクトに感じるとともに、道程の半分以上が隣の川崎市や多摩市の市域であることから、町田市域と何か違いがあるかと考えながら歩く時間ともなった。



E：店舗や図書館が囲み、人々が集える雰囲気がつくり出されている団地内の広場

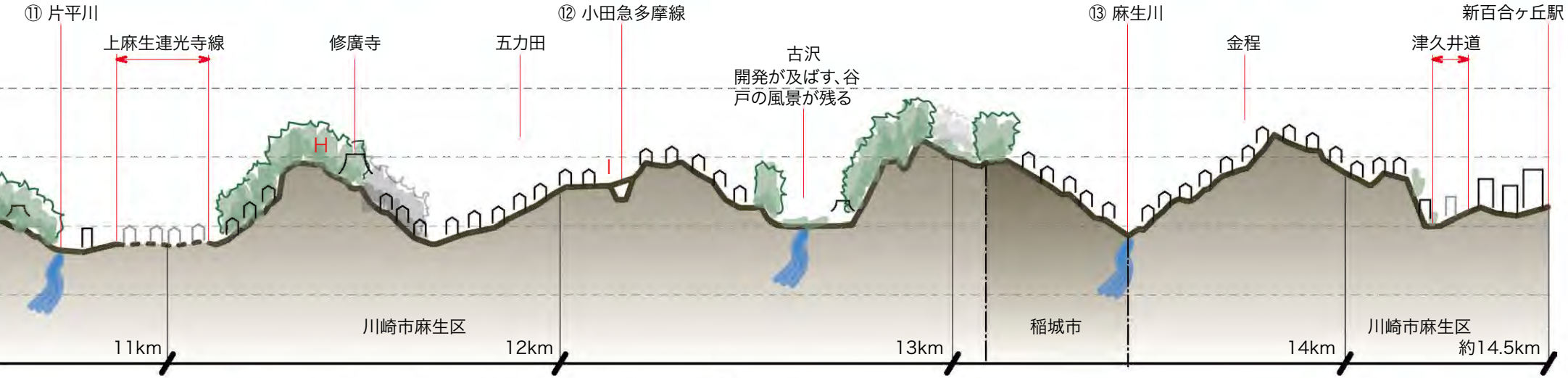
F：住宅地の前景となるこの調整池は住宅地の大切な景観のひとつであり、また、広場的な役割を持たせるための工夫がなされている

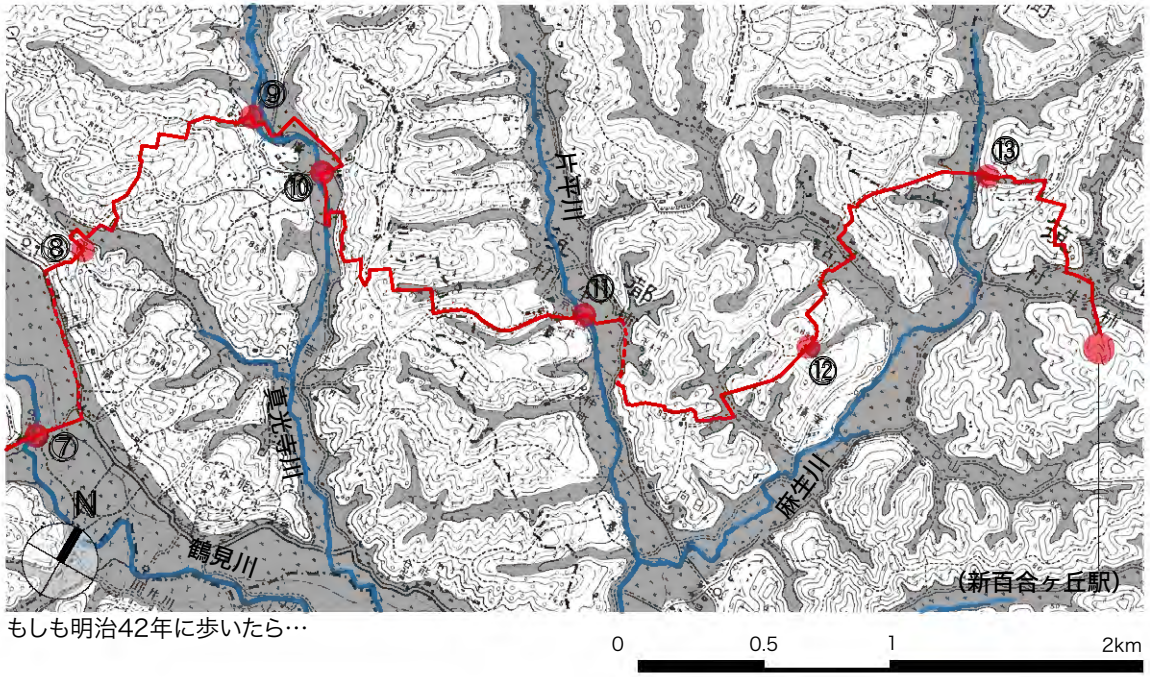


わぎり5 マップ

＜広袴の調整池＞　真光寺川上流域の広袴開発地のために設けられた調整池。通常調整池と言えば開発地の水下に設けられ、柵をめぐらされた排他的な姿となりがちだが、ここでは親水的なつくりが目指され、周辺の緑とともに開発地の玄関口として大切な景観要素となっている。

＜異世界への誘惑＞　断面図を見ての通り、尾根を越えては谷戸に入り込む道程は、それぞれ異なる世界を生み出している谷戸との出会いを繰り返す体験となった。次の谷戸に向かう期待が膨らみ、先へ先へと尾根越えをはやる誘惑に駆られる、わぎり歩きならではのものと言える。





もしも明治42年に歩いたら…

G：平和台住宅地から鶴川団地を臨む。団地群が中景の緑の間に垣間見える

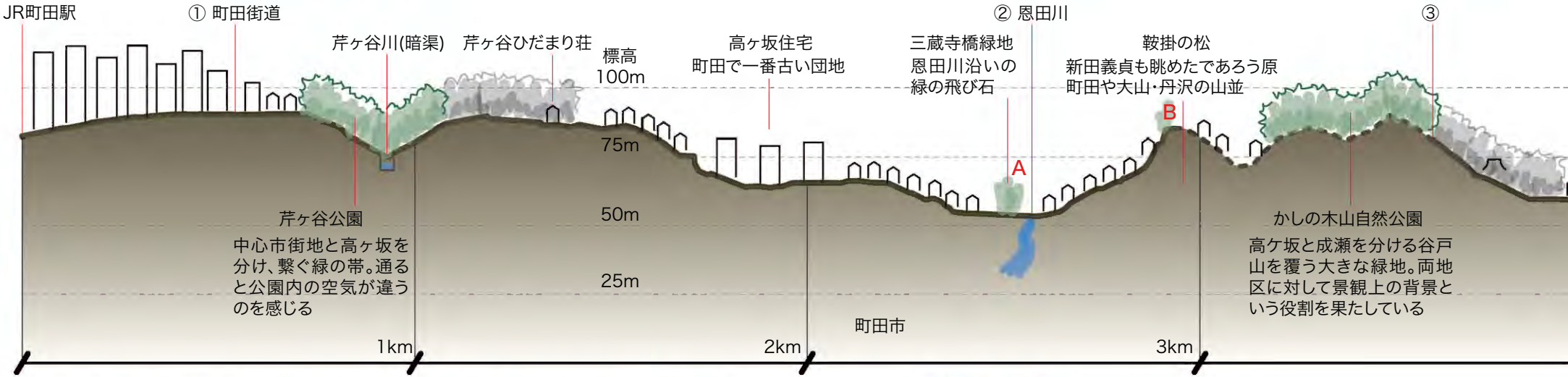
H：修廣寺を裏山から見る。小さな谷戸の中に北に開いて埋まる禅寺

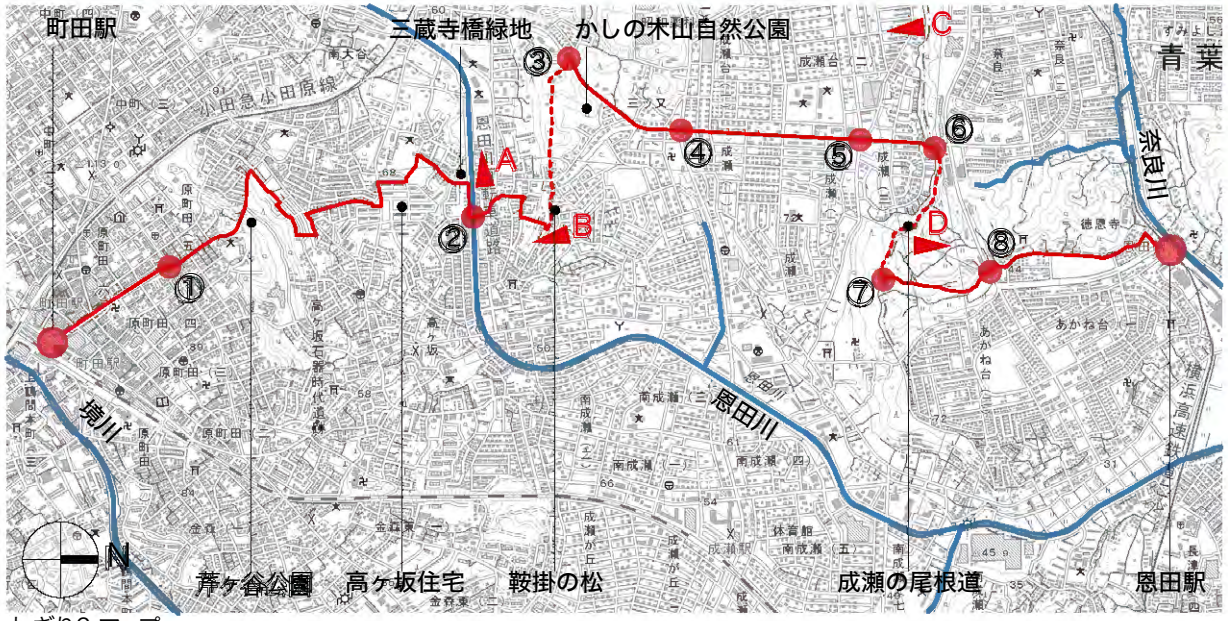
I：小田急多摩線五月台付近から新百合ヶ丘方向を臨む

わぎり6〈 町田ーかしの木山ー恩田 〉

歩行距離：およそ6.9km

町田駅から東へ、恩田川水系の谷戸が南北に幾筋も伸びる地域を恩田駅まで東西に横断するルート。中心市街地からいくつもの新旧市街地を、芹ヶ谷公園、かしの木山、成瀬の尾根など大きな緑を間に挟みながら串刺しに歩く体験は、市街地の中の緑の景観的な意味を考えるのに良い機会となった。



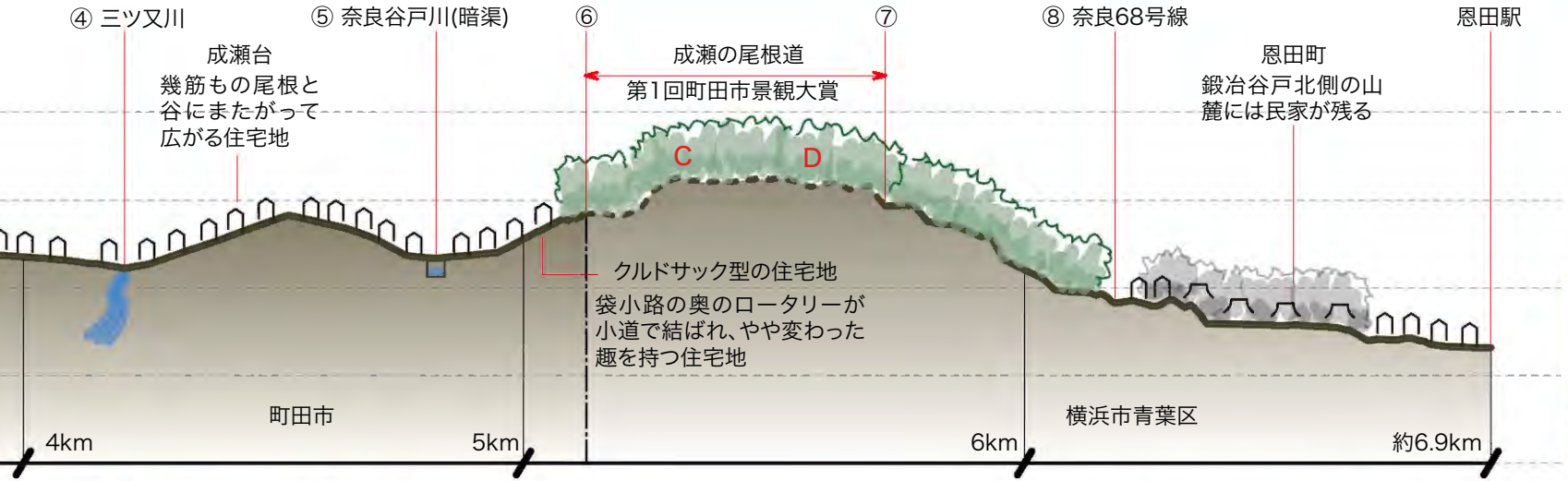


わぎり6 マップ

A：三蔵寺橋からの恩田川の景観。川沿いに犬を連れて散歩する人、ジョギングやウォーキングを楽しむ人など、いつも多くの人が行き交い、人々の生活空間の一部となっている。恩田川は、かしの木山自然公園や芹ヶ谷公園などとともに、この地域において人々の集う景観を形づくっている

＜台地の端から見た眺め＞　町田の中心市街地は相模原台地の端に位置する。標高はおよそ100メートルで丘陵地より高いため北側は起伏の眺望が見渡せ、南に目を向ければビルの間から大山・丹沢の山並みを臨めるという景観は、中心市街地ならではのもの。

＜尾根の緑と成瀬＞　成瀬の西には昭和薬科大・かしの木山自然公園の緑があり、東には成瀬の尾根が横浜市との境として伸びている。住宅地の中からはどちらを見ても緩やかな坂の先に緑の壁が見え、まとまりが感じられる。地域の境のあり方は景観にとって大切であると改めて思わされる。



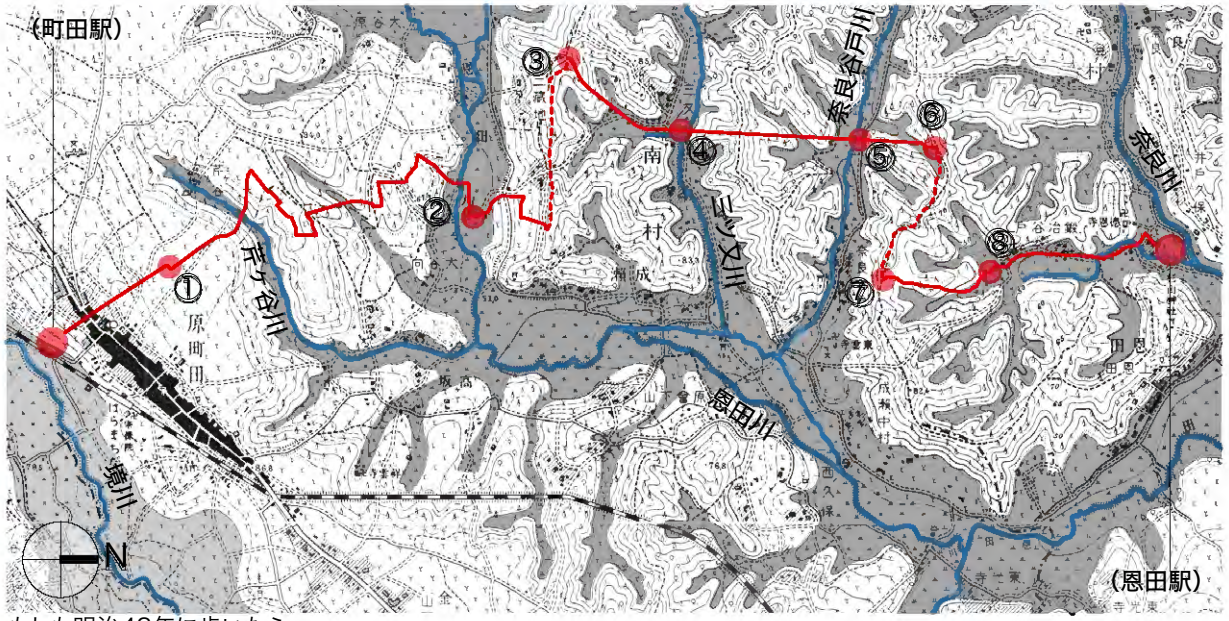
■動物たちがつくる景観

高ヶ坂・成瀬地域の景観は水と緑で形成されていて、とんぼ池、恩田川、三蔵寺橋緑地、芹が谷の水場などが点在する。いつでも空には野鳥の飛ぶ姿、水辺ではカワセミをはじめ様々な種類の鳥たちと魚が一緒に目に入る。地域のあちこちにある緑を飛び石にして行き来する鳥たちでにぎわっている

B：かしの木山から中心市街地を臨む。ほぼ目線の高さに見える

C：成瀬の尾根道から昭和薬科大の緑を見る。尾根の緑が地域を包む

D：成瀬の尾根道から横浜市側を見る。谷戸奥の厚い緑が町田との間を隔てる



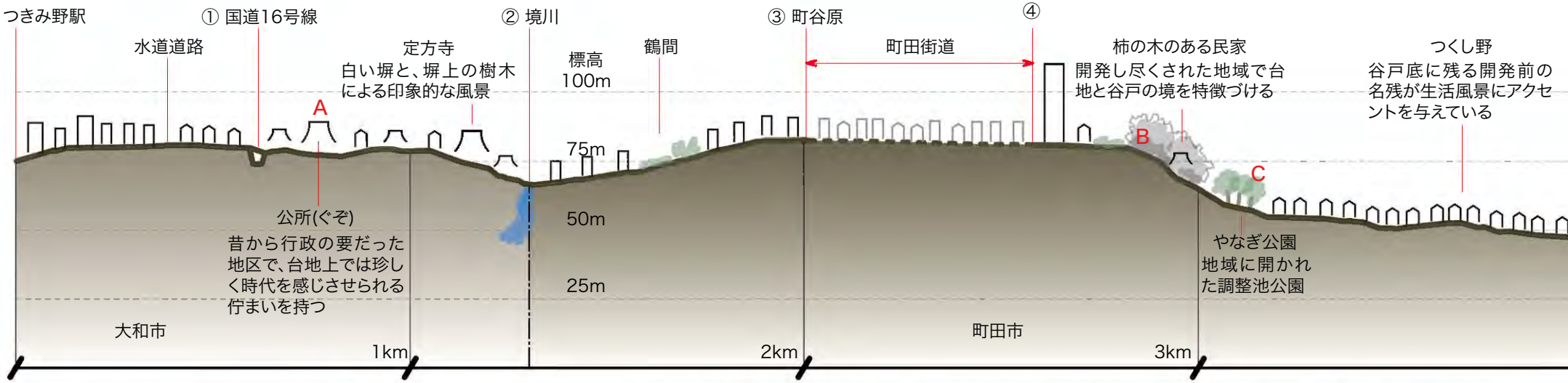
もしも明治42年に歩いたら…

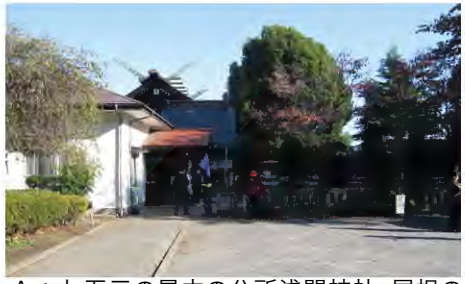
0　0.5　1　2km

わぎり7 〈 つきみ野ーつくし野ー長津田 〉

歩行距離：およそ6.1km

町田市域のうちＪＲ横浜線の南側のエリアを袈裟がけにわぎるルート。恩田川支流の小川がつくった谷戸は成瀬に向かう地勢をつくるが、田園都市線や町田街道など交通路が道程の最も高い地点を通るなど、まちを取り巻く環境がこれまでのルートとはやや違っており、景観としてどう見え感じるか興味深いところ。

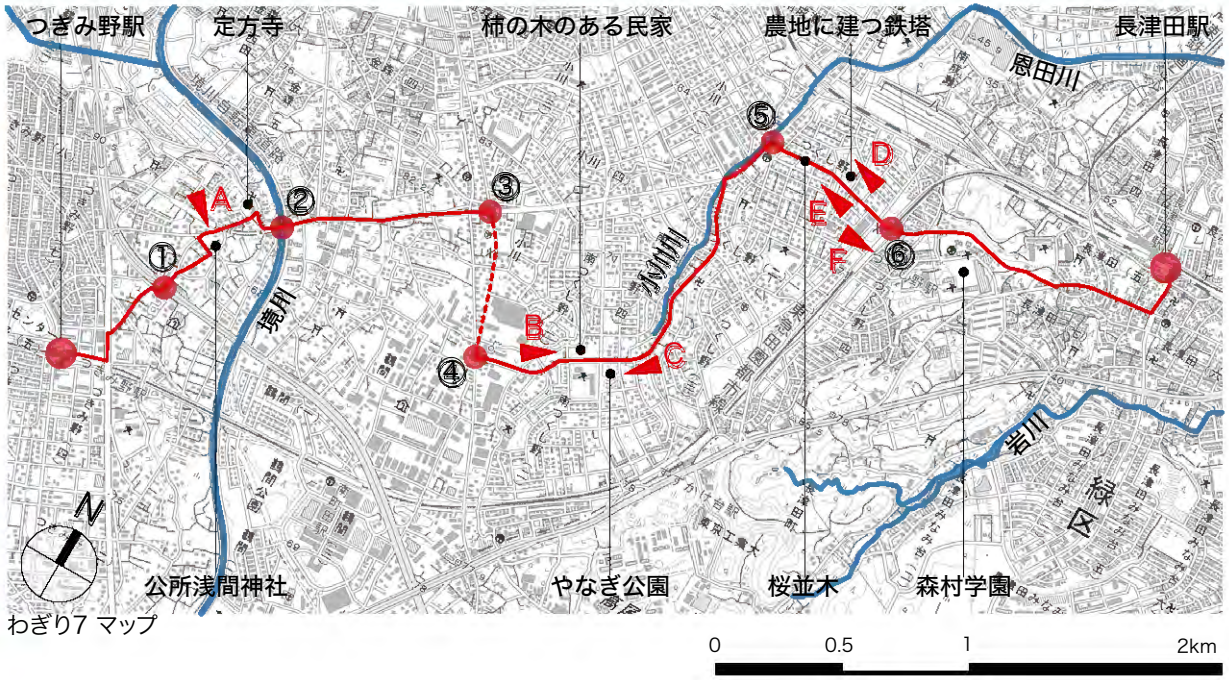




A：七五三の最中の公所浅間神社。屋根の千木や鰹木が住宅地内でひと際映える

B：町田街道からつくし野に下る坂。坂の途中の民家の緑の先に街並が広がる

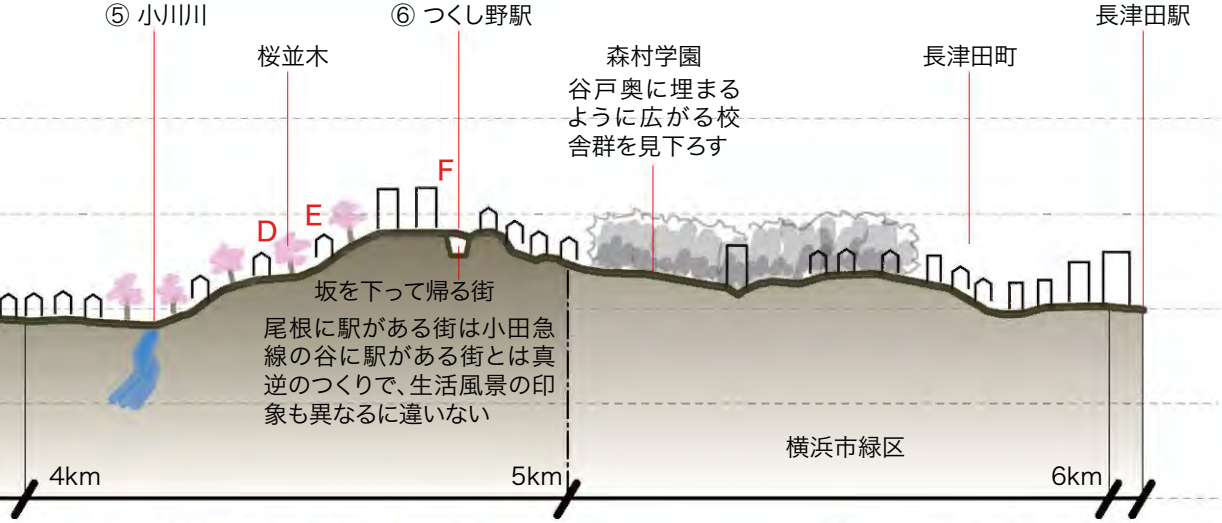
D：台地に広がる農地。住宅地ではうっとおしい鉄塔や高圧線すら伸びやかに見える



わぎり7 マップ

<つくし野の桜並木>　駅からの主要な道に幾筋も桜並木が設けられた街並は印象深く、先人の先見の明が偲ばれる。もちろん主要な道だけで街の風景が形づくられるわけではないが、並木の維持保全を含めた活動が住民の地域に対する景観意識、ひいては共同体意識にどれだけの影響を与えているだろうか。

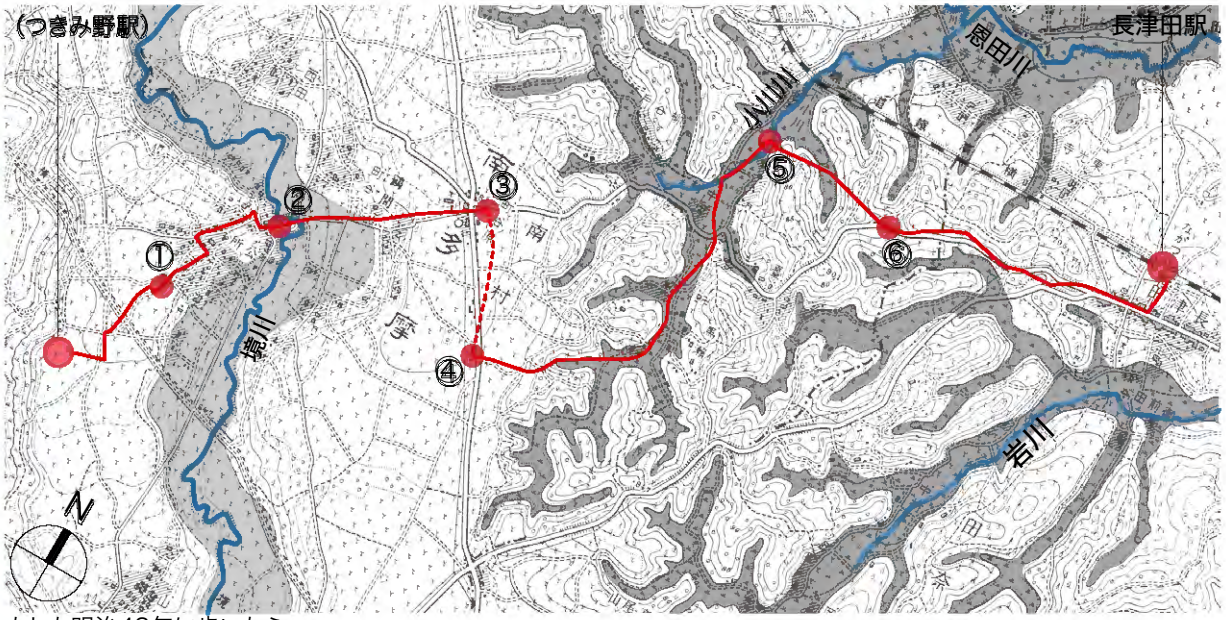
<南つくし野やなぎ公園>　南つくし野の中央に位置する調整池を有効利用した公園。周囲に向けて開放的なつくりで外周の柵も目立たず、近隣の小中学校の校外活動を始め、老若男女のさまざまな活動に活用されており、市街地の地域公園のあり方の好例といえよう。



C：やなぎ公園。隣の中学校は校舎の裏側が面しているが、市民の発案で頂部に時計を設け、公園に対する裏手感を消すという妙手が施されている

E：つくし野駅からの桜並木の下り坂。向かいの斜面に小川地区の家並が広がる。我家のある家並を見下ろしながら帰る街は、町田市内ではJR横浜線以南のこの地域だけ。むしろ川崎市や横浜市で多く見られる風景かもしれない

F：つくし野駅前。尾根上の駅ならではで、駅舎の背景は青空のみ



もしも明治42年に歩いたら…

広袴の尾根から能ヶ谷方向を見る。
左側が平和台住宅地の丘、右側が鶴川団地の丘で、真光寺川の谷戸のかたちが尾根の緑でよく分かる。
正面遠く、鶴見川の先に三輪から岡上の丘の緑が見える

小山田を南側の山腹から見る。
鶴見川の谷戸の北側は北部丘陵の尾根が延々と続く。
その緑と輪郭は小山田の景観の骨格となっている

浮かぶ緑

川崎市飛地の岡上の尾根道から西の方角、金井方向を見渡す。
中央は金井の青木台と呼ばれる丘。
正面遠くに鶴川団地が霞む。
住宅の海にところどころ緑の島が浮かんでいるかのような景色である

相模原台地の端から成瀬方向を見る。
薄く見える緑の丘は、左側がかしの木山、右側が市境の成瀬の尾根。
成瀬の住宅地はこのふたつの緑の帯に挟まれた間に広がっている

トピックス1

わぎり的面白味

古沢の谷戸を越えて尾根に出ると里山の風景が広がっていた

登り下りを繰り返し異世界へ入り込む面白味

各ルートでは、進む先に「どんな景観が待ち受けているのだろう」と、わくわくする気持ちでわぎりを行った。

町田・金井・新百合ヶ丘ルートでは、前半は、尾根筋から見える玉川学園方面や能ヶ谷方面の遠景がその場所に立っている地点との関係を考え、数多くの谷戸や尾根を登り下りしながら歩いた。後半の広袴・新百合ヶ丘などでは、谷戸に隠れるようにある禅寺や谷戸に埋もれるように建てられた集合住宅などと出会うことが出来た。相原・七国峠・八王子みなみ野ルートでは、七国峠越えに感じた「あの山の先に何があるの?」という期待感や、境川上流のうねる川筋と出会い、川に沿いながら街並みが並ぶ光景に足を止めた。橋本・小山・鑓水ルートでは、多摩境通りで歩いてきたルートを振り返り、新しい住宅地と背後の鑓水地域の遠景を眺めながら、地形の変わりよう、今ある街の姿、そしてかつてあったろう景観を想像した。

旧来のスポット的な街歩きのガイドブックは多くあるが、町田を把握するには断片的で、住民目線でなく訪問者目線の傾向が強いという印象が否めない。それに比べわぎり街歩きでは、町田の各地域を隣接地域と併せて地に足をつけて歩くことで、住んでいる地域そのものを直視し考える目線を持つことができる。そこにスポット的な街歩きとは違うわぎり的面白味がある。

五感と六感を働かせて歩く

私達は二次元的に歩くのではなく、三次元的な情報を足で感じその場所に至るルートを横断的にわぎりながら、ルート上のポイントの繋がりを拾い出した。

古道を歩く時は、かつての人達が尾根をまたぎ、峠を越え多摩丘陵から相模原台地に至る道を歩く姿を追体験し、時間的に四次元的予測を行う楽しさがあった。そして、ルートの先に見える景観に入り込み、これまで通り抜けた場所を景観として見返す連続的な体験という異世界へ入り込む楽しさや、ルート上に隣接する地域の関係を考える楽しさもあった。道中では、何かを感じる場所（第六感?）や、音のする場所へ誘われて寄り道しながら視点の変化や視界の変化を感じ、その場所がどのような景観的影響を受けているかを知る楽しみがあった。これからの町田の景観を考える時に、客観的な情報と共に直感的な五感と六感を働かせて歩くことが大切であると感じている。

トピックス2

視点の先

斜面なりに曲がった道路によって開発された住宅地。歩くにつれ次々展開する風景が「見えない先」を期待させる

金井森の丘住宅地。中心街路が緩く左に曲がる先に代官屋敷の緑がそびえて見え、緑に包まれた住宅地景観をつくり出している

人が道路を歩くとき、どういう心理が働いているだろうか

目的地へまっしぐらに突き進んでいるとき、あるいは携帯を操作しながらのときはさておき、普段はきょろきょろとその眼差しは不安定にさまよっているものである。そしてある程度視点が定まるのは「見えるものが見えたとき」と「見えないものを見ようとするとき」ではなかろうか。

つきあたり

道路の正面あるいは視界の前方にあたるところは「つきあたり」と称されているが、「つきあたり」に見えるものが印象深くて心地良かったとき、「その道の景観は良い」とピンと感じるものがあった。ある住宅街の四つ角に立ったとき、四つの道路いずれの正面にも樹木、公園、林、遠くの稜線などが見え、道路自体がこの住宅街の環境の良さを象徴していると思えることもあった。

見えない先

次に、見えないものを見ようとする場合の「見えないもの」を、期待感を抱く意味をこめて「見えない先」と表現してみる。

ほとんどの住宅地で道路は直線であることが多い中、明らかに曲線を意識した住宅地があり、そこでは曲がりきるとどんな光景が広がるか、と歩く楽しみがあった。また、その楽しみは、ある禅寺の曲がった道路に添った白い垣根の先だったり、旧道のくねった先だったりしたこともある。これこそ、先にあるものをみようとしている表れである。

今回は比較的自然が残っている町田市域を歩いたため、好まれるのは主に緑であったが、「つきあたり」や「見えない先」にあるものは建物や工作物でもよいかもしれない。道路の正面に教会や記念物のある風景を見かけるが、道路はその先の建物と一緒になって、良き景観へと私達を導く働きもしている。日本的な参道でも、見えない奥にある神社仏閣を意識できるからこそ、その道自体を心地良いと感じるのだろう。

わぎり歩きでは、「景観」を常に意識しながら町田のさまざまな道、路、径、をそぞろ歩いた。何気ない路であっても前方の光景が何かしら好ましいものであれば、普段の身近な生活圏に潤いをもたらすに違いない。

今後とも「つきあたり」「見えない先」に注目し、そこにさまざまな工夫や演出をこらして、身近に心地よい景観を増やしたいものである。

トピックス3

丘陵地の緑の役割

野津田の尾根。芝溝街道北側の緑のスカイラインは、鶴見川沿い地域の景観の背景となるだけでなく、その向こうにある小野路地域との境を明確に感じさせる

森の丘住宅地西側の公園。下枝の払われた林を挟んで隣接する住宅地が隣り合い、雰囲気の違いを馴染ませる役割を果たしている

町田市の景観ガイドラインでは町田の景観は中景に特徴があると述べられている。多摩丘陵内では、近景と遠景の間のスケール＝谷戸山に囲まれたひとまとまり＝中景が景観の基本形という話だが、確かに丘陵地内では、どこを見てもその向こうの斜面が必ず目に映り、それが谷戸山の緑となると手前の風景の背景としてセットになって見えている。さらに地域ごとに異なる谷戸山の姿は、中景に他所と違う個性すら感じさせてくれている。わぎり歩きの最中にも、地域を取り囲んでいたり、尾根沿いに長く続く壁になったり、孤立していることでまわりから目を引いたりと、さまざまな姿の緑に出会ってきた。思えば、開発以前の丘陵は、開かれた谷戸と緑に覆われた谷戸山が延々続く世界だったであろう。その溢れんばかりが故に無個性だった緑は、都市化の波の中で生き残るうち、各々その残り方なりに景観への存在意義を高めているように思える。

区切る緑

中景を支える「背景」として緑は、多くの場合、地域と地域の境に位置している。特に谷戸が複雑に入り組む多摩丘陵では、谷戸山の尾根が厚い緑で覆われていると、隣り合う谷戸が強く区切られ、全く違った世界がお互いを感じさせずに居並ぶことがありえる。実際小山田の奥や成瀬の尾根などでは、このような谷戸たちを見下ろしながら尾根道を歩いた。

繋げる緑

一方、境を強調する緑があるかと思えば、背中合わせの開発地の間で、雰囲気の異なる地域どうしを、まるで擦(なす)るかのように馴染ませている緑にも出会った。開発地の奥でぽっかり空いた窪地が公園となり、複数の住宅地からの目線が集まる場となっていたり、低い枝が払われた帯状の林が、隣り合う住宅地を分けつつ目線だけ通し、付かず離れずの緩い関係でつないでいたりと、いわば接着剤のように異なる地域をつないでいた。

宅地などの開発では緑は単なる面積として扱われがちだが、丘陵地の緑には中小規模の開発がパッチワークのようにひしめき合う中、中景の背景として地域と地域を区切り繋げるものとしてもっと活躍してほしいところである。そのためには我々市民も、単に緑が多ければ良しという段階を越え、「この緑は景観的にどんな役割を果たしているかな」と考えながら周辺の環境に目を向けていく必要があるように思われる。

トピックス4

隣接地域との景観的違い

金井町の尾根筋から玉川学園方向を臨む。近景・中景・遠景が重なり合って景観に奥行が感じられる

つくし野駅手前の陸橋から恩田川方向を臨む。鉄道は尾根筋に上がってきているため、遠くに見える街並が下方に広がっている

地形的違いによる奥行き感の比較

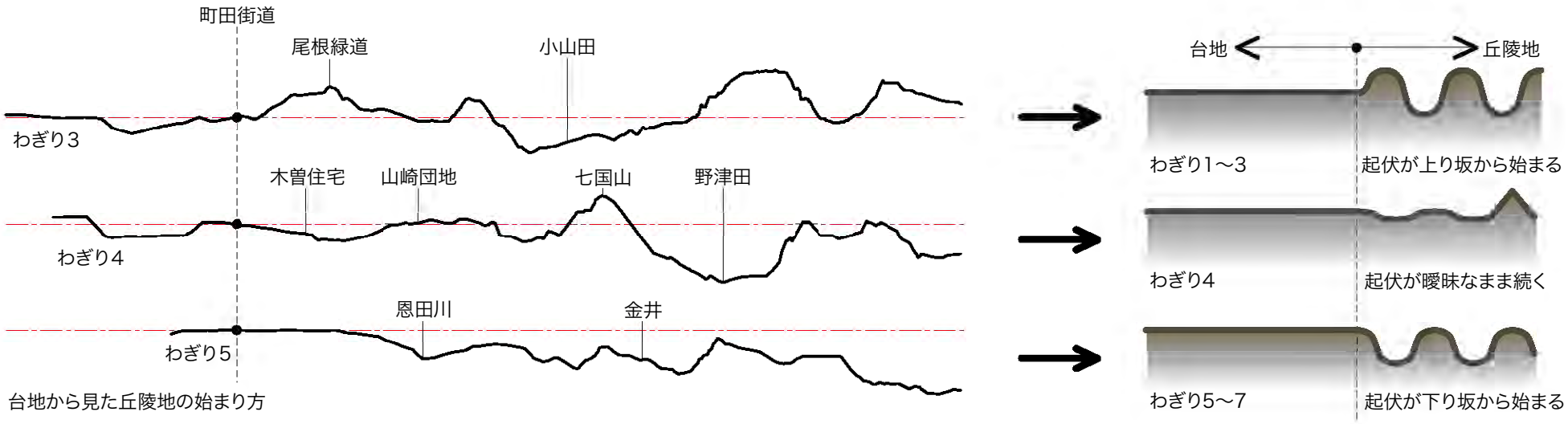
七つのルートをわぎり的に歩くと、隣接する他地域と町田地域との地形的な違い、鉄道路線等の位置の違いにより景観のあり方を比較することができる。南部の大和・相模原地域の景観は、相模原台地から境川へ向かう緩い傾斜の通り沿いに古くから街がつくられている。北部に隣接する八王子・多摩地域の多摩ニュータウンなどの景観は大規模開発によって新しく街が造られたため元地形が推測しにくい。東部の横浜地域の田園都市線は尾根を通過し住宅地開発が尾根筋から谷戸方面に向かって元地形を変えながら街が造られていった。これらの地域で共通することは、街がつくられる過程で、生活風景の中核をなす背景（里山・田畑等）が消され、近景と遠景が残ったため、景観上の奥行き感が少なくなっていることであろう。町田の地形は丘陵地域と谷戸地域が複雑に絡み合って出来た街であるため、住宅地の開発は、他地域と比べ斜面地等での小規模開発が多く雑然とした印象を受けるが、開発から残された緑なども加わり地形的になじんでいるように思える。また、小田急線沿いの鶴川・玉川学園地域は駅が谷戸底にあり、人々は駅から尾根（丘陵地）にある住宅地に向かって上っていくとき、見上げる先に必ず残された背景（緑・住宅等）があるため、景観に奥行きを感じているのではないだろうか。

身近に感じることのできる景観

街の造られ方は、元地形の扱い方（開発の手法や駅の位置）により、その街の景観や人々の生活感に影響を与える。谷戸に囲まれた地域で生活し身近な中景を意識できれば人々はそこが何処かを知ることが出来る反面、平らな地域では、身近な中景がなくそこに住む人や来訪者にとってその場所を意識しにくいのではないだろうか。私達は、景観は遠景・中景・近景から成り立っていると考える。普段、遠景（遠くにある自然風景）と近景（身近な街の垣根や植栽と住宅）に、私達は目をひかれるが、その街の背後にある中景・背景を意識してはどうだろうか。

町田の住まい共生ゾーンの街等は谷戸と尾根にそれぞれ独立して形成され地形的な繋がりが薄いが、中景（背景）となる緑や里山がそれらの街を繋げていることに注目すべきで、これこそが町田市の特徴であり活かしてほしいと考える。

台地と丘陵地の境の風景　－わぎられた町田から見えたもの－



ここまで七つの「わぎり」をひとつひとつ紹介し、さらにそれらに共通するポイントを「トピックス」として取り上げてきたが、それらを重ね合わせてみたとき、全体像として何が浮かび上がってくるだろうか。

高低差を再認識させられたわぎり歩き

断面図からはいろいろな情報が得られる。中心市街地と、かしの木山がほぼ同じ標高なのには驚いた。行ってみると確かに中心市街地は目線の高さにある。イメージとして平地は丘より低いと安直に思い込んでいたためだ。

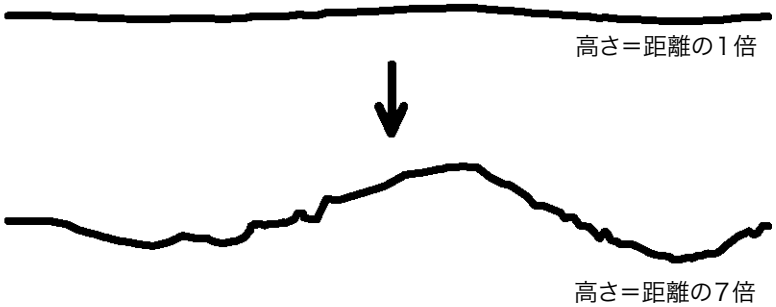
断面を正確に描くとかなりなだらかなのも意外だった。目と足の感触はもっと凹凸のある印象だ。この本では、高低差を分かりやすく見せ、歩いた実感に沿うように、断面図の高さを距離に対して強調（7倍）して描くことにした。人の目には、高さは距離に比べ強調されて映る、あるいは高いものは実際より近くに感じるということだろう。景観において高低差の影響は大きい。

台地と丘陵地の境の風景

平らな台地と起伏ある丘陵地、高低差がある／ないという点ではまさに対象的。しかも町田は市域の端から端までその境が延々続くという特徴を持つ。わぎり歩きでは必然としてこの「境」をまたぐことになるので、台地・丘陵地・境のつながりを地域内、さらに地域間で比較できる。実際、起伏の高低差やその大小、開発の進み具合、緑地の残り方などから、景観は多種多様であった。

紹介ページの断面図を元に台地から見た丘陵地の始まり方を模式図にしてみた（上図参照）。西寄りのわぎり1～3では、台地から丘陵地へは上り坂で尾根を越えるところから始まる。ただその姿は、昔ながらの相原七国峠越えや小山田尾根緑道のような整備された道もあれば、小山のように開発が進んで尾根の存在は薄まりつつある地域もあるといった具合で多様だった。わぎり4では団地群を抜ける間緩やかな起伏が続くばかりで、明確に境を感じる場所は無かった。一方、団地住民はその緩やかな起伏に意味を見出している、との話がグループ内で出て興味深かった。東に寄ったわぎり5～7では、起伏は上りではなく下りから始まる。本町田や高ヶ坂では恩田川の、つくし野では小川の低地に向かって下るのだが、台地と地形的に続いているため、下り斜面は市街化が進んでいる。

わぎり5～7をもう少し詳しく見てみる。わぎり5の本町田では鎌倉街道を下って菅原神社を過ぎると、恩田川北側の南に面した斜面に緑地が延々続いているのが目



断面図での高さの強調（例：わぎり2の断面）

鎌倉街道から眺めた本町田。家並の向こうに緑の帯が伸び、台地から丘陵地に入る境を感じさせる

に入ってくる。この緑地帯は東は小田急線のあたりまで、西は日向山や鎌倉街道を挟んだ向かい側の丘まで続いて見える。そしてこの緑の帯に「ああこの先からは丘陵地だな」という印象を受けた。一旦下った後の最初の上り斜面が、台地と丘陵地の境を示す役割を担っているというわけだ。

わぎり6の高ヶ坂でもかしの木山の緑などにその役割を感じた。また、中心市街地と高ヶ坂の間にある芹ヶ谷公園の厚い緑地帯が、下って上る体験も合わせて、地域を明確に分けているのも特徴的である。

一方わぎり7のつくし野では、境川へも緩く長く傾斜していることもあってどこが台地でどこが丘陵地かすらはっきりせず、丘の形なりにうねった家並に包まれて「ああ丘陵地の中だな」と感じる程度。本町田や高ヶ坂で緑地帯が伸びていた「下った後の最初の尾根」は、ちょうど田園都市線が通っている尾根筋にあたり、逆に街の中心になっている。

町田ならではの景観に向けて

町田市に住み始めたころ、日々の家路や車窓の風景は無秩序な起伏を無秩序に埋める家並みが延々続く世界にしか見えなかった。時間が経つにつれ少しずつ見分けられるようになったが、複雑な印象は相変わらず残ったままである。

台地には台地なりの、丘陵地には丘陵地なりの景観があり、それぞれ個別に考えていくのはもちろんだが、加えて、町田全体に背骨のように通る台地と丘陵地の境＝多摩丘陵の南側のへりは、町田ならではの特徴として、景観的にもっと注視されても良いのではないだろうか。

多摩丘陵に住む人なら、電車や車で多摩川を渡り都心と行き来するとき車窓から多摩丘陵の北側のへりの一段高い地形や緑の壁を見て、多摩と23区の違い、あるいは出かける／帰ってくるという感覚を大なり小なり感じていると思う。それは景観がそう感じるよう意図せずに演出されているから、とも言えよう。町田に属する南側のへりも広域的な景観要素として演出されるだけの素質があるし、「境」が明確になれば、住民が住んでいる地域の性格を理解しやすくなり、複雑な今の風景を整えていく際の助けにもなるように思われる。

わぎり歩きではこの「境」を点的に見ざるをえなかったが、もし市域南端の鶴間から西端の大地沢まで通して見てみたらどうだろう、と気になってくる。また、地図を手に歩きながら「考え続ける」ことになりそうだ。

あとがき

わぎり から せんぎり へ

わぎり歩きのイメージ

　この冊子「町田を わぎる！」をお読みいただきありがとうございます。
「断面で見た町田はいかがでしたか?」
「他と違う町田の景観が見えたでしょうか?」
　景観に対する考え方は人それぞれで異なっています。私たちにとって、「わぎり」という共通の視点で町田を見渡すことは、お互いの考え方の違いを共有し整理することでもありました。
　この冊子は、決してある場所を推薦するものでもなく、私たち数人の意見に賛同を求めるものでもありません。その是非は個々に持つべきものであって、自分の体内で感じるものを良とすべきではないでしょうか。皆様にとって、住む街とその景観のあり方を考えていただくきっかけになれば幸いです。

　私たちの今後の展開は、「わぎり」の続編としての「せんぎり」です。
「わぎり」とは直交方向に、町田を長手に幾筋も切る（＝歩くアイデア）ことによって、どのような発見があるでしょうか?
　いつかお会いできることを楽しみにしています。

＜謝辞＞
この冊子をまとめるにあたって、ご理解いただいた町田市地区街づくり課の皆様、景観づくり市民サポーターの皆様、そしてアドバイザーの皆様にお礼申し上げます。

町田市景観づくり市民サポーター・考え続けるグループ一同
新貞夫・☆大沼徹・○川内孝一・◎清瀬壮一・小寺法子・鎮目義雄・竹中伸光・
永江和彦・間宮早代子・（中村勇）
（◎グループリーダー・○サブリーダー・☆冊子編集リーダー）
写真撮影：新貞夫・大沼徹・清瀬壮一・（中村勇）

※わぎり実施データ

ルートマップ（現代・明治期）	平面図18枚・断面図9枚
わぎり総歩行距離・時間	およそ60Km/66時間
わぎり参加総数	延べ60人
自主ミーティング時間（含編集会議）	12回　65時間
冊子作成作業時間	およそ700時間

わぎり断面図はYahoo! JAPANのルートラボの情報を参考に作成した。

町田を わぎる！

発　行　月　2014年 3月
制　作　者　町田市景観づくり市民サポーター
考え続けるグループ
発　行　者　町田市 都市づくり部 地区街づくり課
〒194-8520　町田市森野2-2-22
Tel　042-722-3111（代表）
刊行物番号　13-100
編集・印刷　コムネッツ株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

文中の地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万分1正式図及び電子地形図25000を複製したものである。（承認番号　平25情複、第704号）
無断複製を禁ず。